子どもたちの社会科学習観の形成のために教師は何ができるか

・・・PRESENTED BY SFS（２班）

問題の所在

何のために社会科を学ぶのか
（社会科の学習観）が子供たちには
伝わっていない。

↓

見えにくい能力の体得という社会科
の学習観を、子供たち自身が納得
するために、教師の働きかけはどう
あるべきか検討する。

目的

（1）子どもたちは、1年間の社会科学習を通してどのような社会科学習観を身につけたか

（2）子どもたちが身につけた「社会科学習観」には、教師の指導とどのような関係があったか

（3）教師は子どもたちの学習観形成を促すために、社会科実践でどのような観点を有しておく必要があるか

①研究の背景

〇南浦⇒調査・分析　柴田⇒実践者

柴田が当時勤めていた学校は、地方都市の典型的な公立学校

柴田は高度な社会科のトレーニングを受けてきた。

⇒もともと「勉強」に対して意欲が高いわけではない子どもたちの

「学習観」の変化を見るのに最適

〇対象　中学三年生

1)義務教育期間の社会科の総まとめ

2)「高校受験」を控えている。

⇒「学習観」の結果、教師の影響の有無を見出すことができる。

②データの収集方法・意図

以下の四つの方法でデータを収集

①計4回にわたる柴田に対するインタビュー

②参与観察

③計5回にわたって、行った子どもたちの「学習観」を探るための質問紙

④卒業後におこなった5人の子どもたちへのグループインタビュー

①②⇒柴田の社会科授業観、その具体的な実践を探る

③⇒「教養的知識の獲得」「概念的知識の獲得」「自己の意見の構築」「多様な価値の理解」「社会参加・行動能力の育成」「学習方法の 獲得」の6つの尺度を子供にわかりやすい形で順位法での質問紙にし、調査。

④⇒質問紙の結果についてのフォローアップ、柴田の授業について記憶に残っていること、「学習観」の変化への教師の影響、影響した内容、3年間での変化を探る。

③データの分析

①②④に関して・・・

インタビュー等の質的データであるため、内容分析を行い、いくつかのカテゴリーに分け、執筆者である二人が検討・考察

③に関して・・・

記述統計データとして扱い、質問紙で順位を付けたものに対して、1位 ＝6点、2位＝5点、3位＝4点、4位以下＝0点で計算し、31人の尺度ごとの合計点を計算し、比較

データから見えてくる結果　(１)授業観

柴田自らの授業観

（生徒みんなのイメージの社会科は）「知る」だと思うけど・・・

社会科は「知る」「わかる」「生きる」「つくる」

→単なる知識獲得だけでなく、思考力や判断力の形成を目指した授業づくりを

「議論討論とは、誰かと話して、何かをつくる」＝子ども同士の対話で社会を考え、構築

このような授業観の源は？
①社会科学習目標の構造の概念（小原）、社会科授業観（池野）
社会科教育理論（岩田）などの出会いや研究会での人脈確立

②社会構成主義的な授業観を持つ大学院の指導教官との出会い

(２)子どもたちの「学習観」変化の全体的傾向

①4月の時点では、「学習方法」以外については
　軒並み同程度の割合で肯定感を持っていた。

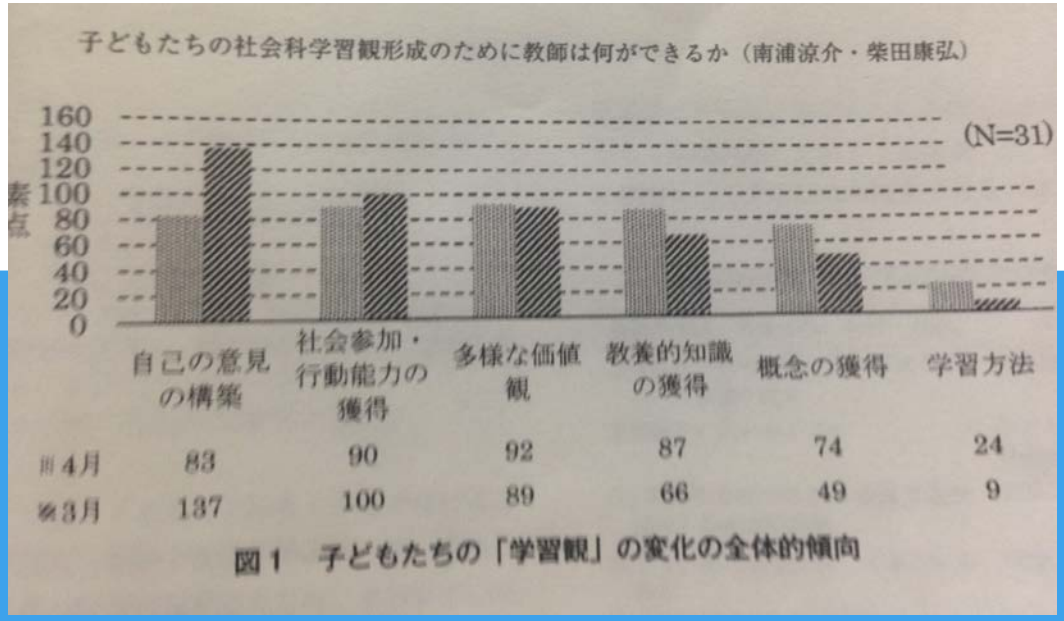
②年度終了の3月の時点で、年度開始の4月と比較した際に、
　「自己の意見の建築」が突出して肯定度が高くなっている。

③「教養的知識」「多様な価値観」については漸減しているものの、
　それほど大きな差は見られない。

④「概念獲得」「学習方法」については年度が進むにつれ
　緩やかに支持が下降する。

※柴田の重要視する
「社会構成主義の観点から、
自己の意見を出し合わせたい」
「それを持って議論を行わせ、
社会を考えていくという点を
重要視したい」という意味では

「学習観」と概ね一致



（３）「学習観」の変化に対する教師の影響

～研究の際に行った５人へのインタビューより～

大半の人が「意見」重視に傾いた（１人はもともと持ち合わせていたと考えられる）

↓（子どもたちの意見）

・授業で得た社会科で大切だと考える事柄が結果的に受験にも活かせる。

・実際に社会では意見力が必要で、今後もこうした「学習観」は重要である。

①教師の意図を込めた継続的学習活動

ほぼ毎回の授業の冒頭で最新の社会問題が紹介され、社会形成や社会に生きることにつながる意見を自然と発する活動を通して子どもの「意見をいうこと」に対する意欲の向上

②目的に直結した教師の言葉がけ

⑴「明示的な言葉がけ」

→「社会科の勉強で大切なこと」を示す　ex.「因果関係」「民主主義」

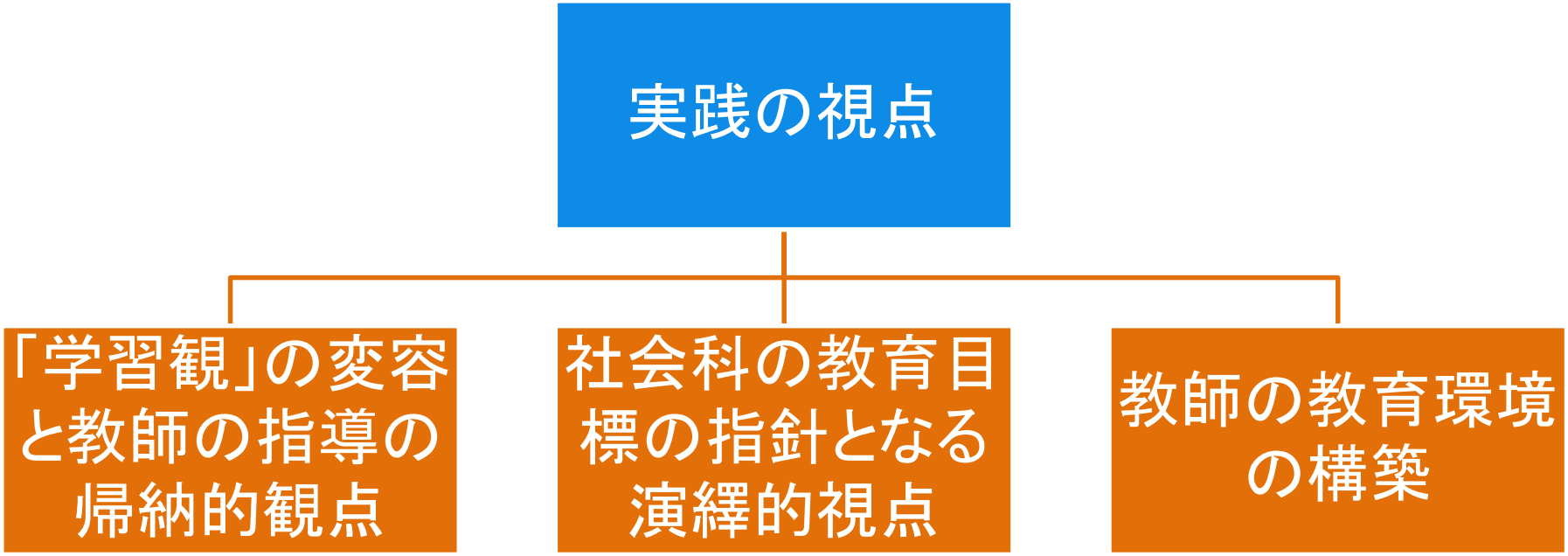
⑵「暗示的な言葉がけ」

→「理由や背景を踏まえることの重要性」　ex.「なぜ？」の問いかけ

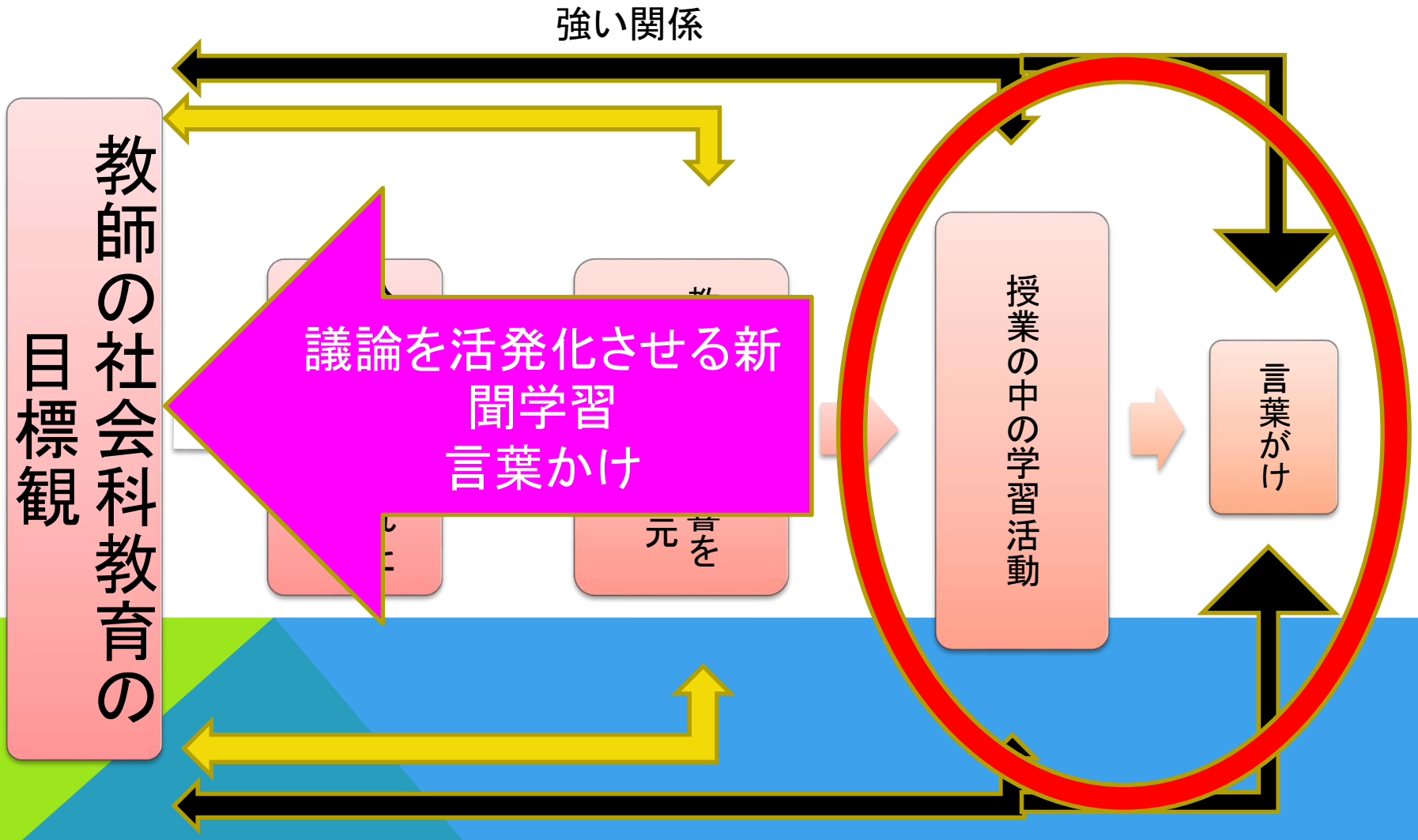
③学校環境の変化

上学年となったことや学校環境がこの数年で大きく変化（学習環境も重要な要因）

社会科「学習観」形成を促す実践の視点



「学習観」の変容と教師の指導の帰納的観点



子供が直接感知可能な場

社会科の教育目標の指針となる演繹的視点

教師の社会科教育の目標観

大学院時代に得た社会科授業構成の「型」
→「議論」を中心軸に据えた社会科授業観

授業の中の学習活動

言葉がけ

子供が直接感知可能な場

教師の教育環境の構築

授業

- 新聞を使って議論する活動
- 目的による言葉がけ

生徒会活動

- 学校全体の問題を議論するように促す

教科の研究

- 学校カリキュラムの改善

日ごろの授業を受けた子どもの学習観の変化が、学校全体の雰囲気に変化を与えた

まとめ

1) 教師は自身の社会科における教育目標を、「学習活動」や「言葉がけ」のレベルにも意識的に入れ込むこと。

1) 教師自身の社会科教育目標観の確立が重要であること。

1) 自身の社会科授業でなく、学校カリキュラムとしての教育目標との一致をはかること。

重要センテンス

…THANK YOU FOR LISTENING!!!!

① 知識基盤社会・グローバル社会といわれる昨今，社会科の学習には単に「知識の形成」を越えて，思考力や判断力，市民性，社会参加力ーといった、いわば「見えない能力の形成」という観点が必要とされている（p.26）

② 受験と学習を分けて考える姿勢や、授業で得た社会科で大切だと考える事柄が結果的に受験にも活かせることができるなどの考え方を持っていることが示された。（p.29）

③ 子どもの発言に対して実際に「なぜ」と問い返すことで、「理 由や背景 を踏まえることの重要性」を子どもたちに含ませている（p.32）

④ 意見を述べた時に対する「なるほど」という肯定が，子どもたちにとって は暗にそうした行為の重要性を感じ取らせるものとなっている（p.32）

⑤ 従来の社会科教育研究ではこうした社会科の重要な学びを、「単元」とい うレベルで実現させようとしていた。（p.33）

⑥ 教 師は自身の社会科における教育目標を，単元や授業のレベルで暗示的に 入れ込むだけでなく、「学習活動」や「言葉がけ 」のレベルにも意識的に入 れ込むこと。（p.35）

⑦ 自身の社会科授業だけでなく、学校カリキュラムとしての教育目標との一致をはかること。（p.35）